

エコロジ 意識 再考：日本の環境中心的感性をめぐって

著者	結城 正美
雑誌名	フォリオa
号	5
ページ	200-205
発行年	1999-02-15
URL	http://hdl.handle.net/2297/44627

〈エコロジ―意識〉再考

日本の環境中心の感性をめぐって

結城正美

環境学者ステイフン・ケラートによる自然環境をめぐる意識の日米比較調査によれば、日本人のエコロジ―意識（以下、このことばを「自然環境・生態への考慮」という意味で用いる）はアメリカ人のそれに比べて格段に低い。^{*1} 大学生の生物学的知識の貧弱さからも証明されるように、日本人は物理的な自然環境にまつわる知識がきわめて低く、美的、文化的に洗練された自然への志向が顕著であるとケラートは報告している。また、日本の自然観は明治時代に西洋思想が輸入されて以来変容したという当然予想される反論に関しても、抽象化と理想化を好み経験的理解が弱い点で、伝統的自然観と現代日本人の自然観は基本的につながっているとケラートは主張する。結論的にいえば、日本の自然観は、自然との調和を重視する点では積極的に評価されるべきである一方、エコロジ―にまつわる知識・意識の低さが環境保護を促すうえで大きな欠点になっているという。

だが、本当に自然環境をめぐる日本人の意識は低いのだろうか。エコロジ―意識を測る際にケラートが用

いている判断基準は、主として「環境保護意識」と「生物学的知識」の度合いにあるが、これらははたして基準として適切なのだろうか。環境歴史学者リチャード・ホワイ特が指摘するように、環境保護を善として疑わない姿勢には、環境保護者の道徳的優越性が潜んでいる可能性はないだろうか。^{＊2}すなわち、保護するという姿勢には、人間が自然環境の運命を左右する権利をもっているという見解、アリストテレス以降、西洋の知的土壤に根づいている人間の卓越という観念が内包されている場合があるのではないだろうか。また、ケラートは生物学的知識を測定するために〇×テストの項目——「ほとんどの昆虫には背骨がある」「すべての成鳥には羽が生えている」等——を用意したが、はたしてこのような項目に関する知識をもっている人ほどエコロジー意識が高いと言えるのだろうか。

思うに、日本人の日常生活には、「環境保護」というラベルこそはられていないが、結果的に自然環境を考慮しているような習慣が少なくない。たとえば、洗濯物を外に干すという習慣。これは当たり前のようになっているが、じつはかなり「エコロジカル」な行為である。太陽の消毒効果、風の乾燥作用を利用し、梅雨の晴れ間や冬の寒風のなかでも洗濯物を干す風景は、エコロジー意識が高いといわれつつ洗濯日和の晴天でも乾燥機を利用する合衆国ではほとんどみられない。また、家屋の暖房システムをとってみても、日本では、合衆国の「セントラル・ヒーティング」のようなスイッチひとつで家中を温める無駄な消費を極力避け、使用している部屋にだけ暖房機を置くことがまだまだ一般的である。セントラル・ヒーティングはじつに快適ではあるが、それは自然環境に逆らった快適さであり、「寒い」という自然現象を人為的にコントロールすることにはかならない。家屋構造や燃料費の相違も関連しているのだろうが、背中を丸めてこたつに入っている人たちは、屋内では冬でもTシャツ一枚で暮らしている人に比べて、ずいぶん自然環境にしたがった生活を送っているのではないだろうか。このような生活習慣は私が考えられる範囲のものであり、私の世代以前

に消え去ってしまった習慣も多いことだろう。いずれにせよ、日本人の生活に深く根づいている、あるいは無意識的でさえあるような環境中心的な諸実践は、環境保護意識が支配的なケラートの視角からはとらえることはできない。

日本の生活風土には、アメリカ的エコロジー意識で汲み取ることでできない環境との関わりの在り方がある。これは、ジャパニーズ・ネイチャーライティングを検討する際に考慮すべき重要な点のひとつである。このアメリカ的エコロジー意識と日本人の環境中心の感性との相違は、双方の「場所の感覚」のちがいに現出せると思う。詩人シェイマス・ヒーニーによれば、「場所の感覚」は2通りに大別される——「ひとつは記述されておらず、無意識的で、生きられた在り方、いまひとつは記述され、意識的で、学習された在り方」。³ 程度の差はあるが、ウォーレス・ステグナー、スコット・ラッセル・サンダースをはじめとするアメリカン・ネイチャーライターが提唱している場所の感覚は、主として「記述され、意識的で、学習された在り方」であり、合衆国の伝統的移動生活がもたらしたさまざまな歪みをめぐる省察から生じたものである。対照的に、日本人の場所の感覚は、洗濯物を戸外に干す習慣が「エコロジカル」だと意識されていないのと同様に、無意識的な生きられた次元にあるといえるだろう。そのような場所の感覚を文学にあらわしている作家に石牟礼道子がいる。

『苦海浄土』（一九七二年）や『天の魚』（一九八〇年）等で、水俣病患者をはじめとする地域の人々の声を文学に書き綴っている石牟礼は、水俣の方言を独特なたちであらわした彼女特有の言語——石牟礼弁——でよく知られている。「水俣弁をわたしたちは書きませんし、読みません。それが字になったら読めません」とある住民が言うように、水俣のことはあくまでも話し言葉である。⁴ 石牟礼が、「通用語」や「標準語」という中央と地方の位階制を孕んだ書き言葉を拒み、人々の日常言語である「水俣のことば」に執着するの

は、ひとつにはそれによってしか人々の生きられた感覚をとらえられないからであろう。石牟礼の作品には、この〈中央〉と〈地方〉の力関係がきわめて意識的に描出されており、それはたとえば〈チツソ〉と〈患者〉、〈東京〉と〈水俣〉、〈標準語〉と〈水俣弁〉、〈知識層〉と〈非知識層〉というかたちで提示されている。そして〈地方〉の知の在り方を下等なもの、遅れたもの、洗練されていないものとして蔑む〈中央〉的見解を、石牟礼は次のように痛烈に批判している。

（水俣の）人びとは己の内面を言語化する時、近代的なマスメディアのことばをとらない。おくれた田舎の年寄りたちの、保守的ともとれる眩きの表現をとってそれはあらわれる。若い世代と旧世代との断絶という風に、つねにたやすくそのところが切って捨てられる。あるいは知識層と非知識層のそれという題目が立てられることがあるにしても、知を名乗る側は、己の出自が、もと大地に根ざす種であつたという感性を失っていて、根の消失から出発しているという自覚がない。^{*5}

標準語では語られ得ない〈地方〉の感性、人々の生きられた場所の感覚は、近年のエコロジー概念ではとらえることはできない。無論、杜撰な自然破壊をくい止めるためにも、環境問題をめぐる意識を高めることは重要である。しかしながら、新たに出現した社会的・政治的・文学的エコロジー運動に盲目的に従い、そうした知識をもたない、あるいは生物学的用語と縁のない人々を軽視することは、石牟礼の批判する知識人の在り方にほかならない。

合衆国から発信された近年のエコロジー意識と運動は、自然環境をめぐる危機感の高まりとともに広く定着した観があるが、この動向に関して懐疑的見解を表明している人は少なくない。ジャーナリスト本多勝一

は、イルカが漁場を荒らすとして捕獲に乗り出した長崎県壱岐の漁民と、その捕獲を急進的手段で妨げようとする合衆国の動物愛護運動家をリポートし、合衆国側の動物保護運動に「日本的風土と文化を無視したアメリカ的覇権主義による非論理的手段」が認められると指摘している。^{*6}また、合衆国南西部ラグナ・ブエプロ作家レスリー・マーン・シルコーは、デイブ・エコロジー運動を場所の感覚の喪失にもとづくものと位置づけている。^{*7}さらに、長年にわたって合衆国南西部アパッチ族の世界観を研究している文化人類学者キース・バツンは、学問的な見地から人と自然環境との関係を研究することの危険性を示唆し、人々の自然や場所との関わりの中を生きるには、「腰を下ろして、その地域の人々のはなしをじっくりと聞く」ことが不可欠だと説く。^{*8}エコロジー意識というモノサシでははかることのできない日本人の環境中心の感性をとらえるには、案外身近なところから、家族や隣近所の人たちのはなしに意識的に耳を傾けることから取りかかるべきなのかもしれない。

注

^{*1} Kellert, Stephen R. "Concepts of Nature East and West." *Reinventing Nature?: Responses to Postmodern Deconstruction*. Ed. Michael E. Soulé and Gary Lease. (Washington, D. C.: Island P, 1995) 103-21.

^{*2} White, Richard. "Are You an Environmentalist or Do You Work for a Living?": *Work and Nature*. *Uncommon Ground: Rethinking the Human Place in Nature*. Ed. William Cronon. (New York: Norton, 1995) 181.

^{*3} Heaney, Seamus. "The Sense of Place." *Preoccupations: Selected Prose 1968-1978*. (New York: Farrar, 1980) 131.

^{*4} 座談会「水俣調査の課題をめぐって」『水俣の啓示——不知火海総合調査報告(一)』色川大吉編(筑摩書房、一九八三年)四八九頁。

^{*5} 石牟礼道子「乳の潮」『水俣の啓示(下)』三六七—六八頁。

* 6 本多勝一「なぜイルカなのか?」『日本環境報告』(朝日新聞社、一九九二年)一〇二頁。

* 7 Silko, Leslie Marmon. *Almanac of the Dead*. (New York: Penguin, 1991) 689.

* 8 Basso, Keith H. *Wisdom Sits in Places: Landscape and Language among the Western Apache*. (Albuquerque: U of New Mexico P, 1996) 68.